

一仏両祖の教えを今に伝える

令和5年6月1日発行(毎年1.3.6.9月の1日発行) 第165号

# 曹洞禅グラフィック

SÔTÔZEN GRAPHICS

2023お盆 夏号

No.165

インタビュー  
奈良修一 師

お盆の過ごしかた  
——死を想い、  
命の繋がりに気づく

【聞き手】加藤順子



## 日本自殺予防学

会で「なぜ自殺をしてはいけないか」という題で自殺予防の専門家で



しまの すずむ  
1948年生まれ。宗教学者。  
東京大学大学院名誉教授。上  
智大学神学部特任教授。同グ  
リーフケア研究所所長。専門  
は日本宗教史。

んな状態に陥って、六十歳前後の現在までそんな心の状態からはなれられない、けどどういう人たちを助ける活動がしたい、そういう知人と話し合いました。

ある精神科医と対談をする機会がありました。日々が辛く生きる力がわいてこない、生きていく意味がわからない、とにかく死にたい、死んでらくになりたい——このように感じ続け、行き詰まっている人にどう語りかけることができるでしょう。

「自分のいのちを粗末にはしていない」というのが昔ながらの言葉のように思います。さほどのつらさを感じていない者としては、「近親や親しい者がどれほど力を落とすか考えてほしい」というのが、もっとも言いたいところでしょう。しかし、当事者は「他の人のことなど考えていられない」というのが死にたいと思う人の本音でしょう。他の人の激しい落胆を考えるほどの心のゆとりがあれば、自殺を実行しようとするところまで追い詰められたと感じはしないでしょう。

どつぽにはまった心を、他の人の気持ちを考えられるところまでどう引き上げることができるといふことかと思えます。二十歳前後にそ

そこでたくさん教えられて、私なりに思い至ったのは、「いつまでも今のようにつらさが続くかどうかかわかりますか」という問いかけでした。「少し様子が変わるかもしれないね」、「先のことまでなかなかわかりませんね」。そして、「もしかすると生きていてよかったと思うときがあるのではないでしょうか」というところまで言えるかもしれません。

先のことはわからないというのは、誰もがふだんから感じていることなので、「そういえばそうだ」と思ってくれるかもしれません。「運があり、縁というものもありますよね。死者も含め家族や他の人が居て、天地万物もあるから運も変わり、縁もできるのではないでしょうか。」ということとは「いのちは自分だけのものではない」ということにもなるでしょう。「思いがけない恵みということもないとは言えないのではないでしょうか」とまで言えるかもしれません。

このようにすすいと進むなどとは思って

いのちは

島蘭進

自分だけのものではない

ません。ただ、これは自分がつらかったときに自分を支えた考えを再現したものでもあります。ただ、はじめから「いのちは自分だけのものではない」と言っても、相手の心になかなか届かないでしょう。

「予測できない。何が起るかとは分からない。」ここにすでに希望があり、自己超越の手がかりがあります。宗教者や教師は答えを求められているとともに、このような未だ見えていないものを信ずる姿勢を求められているようにも思います。答えよりもそうした姿勢が人の心を動かすことがあるようです。





# お盆の過ぎしかた

死を想い、  
命の繋がりに  
気づく

新型コロナウイルスが感染症法の五類となり  
初めてのお盆がやってきます。

この数年は、お彼岸の墓参やお盆の迎え火なども  
自粛していた方も多かったのではないのでしょうか。

今年の夏には、普段は会うことの出来ない家族や親戚、  
地元の友人との会食を計画している方もいらっしゃるでしょう。

こうしたことはお盆時期の楽しみの一つでもあります。

歴史学者でもある奈良修一師は、多様な墓事情があるいま、

お盆という行事の意義を再確認して欲しいと仰います。

この行事をとおして、自分のいのちの有り難さ、

日々のお参りのしかたなどを知り、

より豊かな夏を迎えるためのお話をうかがいました。

境内では柴犬の柚(ゆず)と椰(なぎ)がお出迎え

## お葬式が教えてくれること

**加藤** 奈良さんは、鶯谷のお寺のご長男として  
お生まれになり、僧侶としてご修行なされると  
ともに、大学で研究を続けられていたとのこと。  
大学院ではオランダに留学なさっています。が、  
お寺を継ぎ、お坊さんになることはいつ頃決め  
られたのですか。

**奈良** 中学生の時ですね。幼い頃から寺の作業  
を手伝っています。法清寺は一六四九(慶安二)  
年からありまして、昔は檀家数がかなり少な  
かったと聞いています。父親は大学の教授をしな

がら寺を護っていました  
が、檀家さんが増えてき  
てからはそれもきつくな  
りました。私が高校・大  
学くらいの時からお檀家  
さんが増えだし、高校の  
頃には、父に代わってお  
通夜に行かされていまし  
た。

**加藤** 高校生でお通夜  
に！ お父上は駒澤大学  
の学長や永平寺の西堂も



なら しゅういち  
東京都生まれ。曹洞宗の僧  
侶で、歴史学者。慶應義塾  
大学から同大学院へ進み、  
文学部史学科東洋史を専攻  
し、明清外交史を中心に研  
究。一九九〇年にオランダ  
にあるライデン大学に研究  
員として留学し、オランダ  
東インド会社の研究を深め  
る。現在は、公益財団法人  
中村元東方研究所の研究員  
であり、東京都台東区にあ  
る法清寺の住職でもある。  
著書に『鄭成功・南海を支  
配した一族』(山川出版社、  
二〇一六年)がある。



務められた奈良康明先生ですので、大変にお忙しかったと思います。大学を卒業されたあとオランダへ留学されたそうですが、いかがでしたか。

**奈良** 〓 オランダのライデン大学で研究をしていたのですが、その三年半お寺から離れたら、お葬式に参列する機会がなかったことが私にとってはショックでした。お寺では日常にお葬式がありますが、一般の方はそうではないですから、「死」が身近ではなく、自分がこうなるということを身近に体験しにくいんだなどということがわかりました。

**加藤** 〓 ここ数年はコロナもあり、身内のお葬式以外に参列する機会は、特に減ってしまいました。

**奈良** 〓 そうですよ。お寺にいますとお檀家さんなどのお葬式が、一



定数あるのです。つまり知っている方が亡くなっているわけです。身近な方の死に面して、なるほどこういうものなんだな、いつかおれもこうなるんだなっていうことを経験しているわけですよ。ところが一般の方はそうは行きませんね。臨終も病院ですし、このごろは家族葬が増えて余計に「死」に出遭わなくなりました。お葬式というのは「おれもいつかこうなる」ことを知る大切な機会なんです。お葬式の雰囲気というのは独特ですし、経験しておかないと分か

らない。理屈じゃないですからね。

**加藤** 〓 先日義理の父を見送りましたが、コロナ期間中に入院していたので、結局会えず終いでした。なので、亡くなったと聞いてからも変わらず病院にいるような気がして、実感が湧きませんでした。

**奈良** 〓 そういう方、多いですね。お葬式というのは一つのけじめになりますし、参列者や遺族にとつてけじめをつけることが重要なのです。たとえば、精進落としての場で、故人の思い出をいろいろ話すのを、「うわさ供養」というんです。

**加藤** 〓 うわさ供養。初めて聞きました。

**奈良** 〓 これは下町の言葉かもしれませんが。うちの総代さんがよく使っていて、告別式が終わって火葬して戻ってきて、その後、精進落としがあります。そのときに「どうぞ亡くなった方の思い出をいろいろ話してください、うわさ供養ですの」って。故人に想いを馳せ、参列者たちがそれを共有することで、故人への気持ちを濃くし、また整理していく、大事なご供養だと思います。

### 「お盆」というのはなぜ？

**加藤** 〓 お盆といえば、ご先祖様を自宅にお迎えしてご供養したり、盆踊りがあったりしますが、そもそもなぜ「お盆」というのでしょうか。

**奈良** 〓 お盆の行事は「盂蘭盆会」とも言われます。これは、三〇四世紀の竺法護という人がインドのお経を翻訳したとされる『盂蘭盆経』からとつているのですが、そこには仏さまの弟子の目連さんが、餓鬼道に堕ちたお母さんを供養して救ったことが説かれています。ここに書かれているように亡くなった方やご先祖様を偲び供養する仏教行事を略して「お盆」といったのだと言われています。

「盂蘭盆」という言葉の起源については諸説あります。インドの言葉で「ウドゥ・ラン」（逆さに吊す）という言葉から「ウランバナ」という語になり、これが「盂蘭盆」になったとよく言われていますが、意味が取りにくいのです。それよりも、次に紹介する説のほうがわかりやすいと思います。お釈迦様の時代のインドでは「雨安居」と言つて雨期に三か月間家にこもります。それが終わると、お檀家さんたちがご飯を盛つてお坊さんたちをご供養するんですが、その時



のご飯を「オーダナ」っていうんですね。そのオーダナをのせる容器（盆）というところから、盂蘭盆という言葉が出たんじゃないのかと仏教学者の辛嶋静志先生がおっしゃっています。この説はなかなか分かりやすいかなという気がしています。

また、インドのほうの『餓鬼事経』（ペータヴァットゥ）という経典にも目連さんのお話が載っていますが、日本ではこの話しが「盆踊り」の起源だとも言われています。お母さんが救われたことを喜んで目連さんが踊ったのが盆踊りの起源だというんですが、実を言いますとこの盆踊りの話は日本だけにしかないのです。『ペータヴァットゥ』にも、『荊楚歳時記』にもこのお話が載っていて、「喜んだ」という話はありますけれども、「踊った」という話は一切出てきません。もともとインド仏教においては、お坊さんは音楽とか踊りに触れちゃいけないことになっているんですよ。だから、お坊さんが踊るということはありません。

**加藤** では、なぜ日本ではこれが盆踊りの起源とされたのでしょうか。

**奈良** それは、空也さんの踊り念仏の影響でしょう。楽器を鳴らし、踊りながら念仏を唱える。

まりお墓があのでとの窓みたいになるんですね。

**加藤** お墓がない、または遠くにある方はどのようにしたらよいでしょうか。

**奈良** 今は、お墓の場所も形式も様々ですね。自宅での迎え火送り火ではお仏壇にお迎えする方が多いでしょうから、お位牌が先祖との語らい、亡き人の語らいには非常に重要であろうと思います。お墓には行きにくいこともあると思いますが、お位牌があれば故人やご先祖様をとて身近に感じられると思うんです。普段もそうです、お盆ではご先祖さんが帰ってきて、一緒に過ごすわけですから。そこであらためて

その念仏踊りが盆踊りと結び付いたんじゃないかと言われています。

**加藤** 今年の夏は、提灯の明かりの下で踊りながら、ご先祖様との繋がりに思いを馳せたいですね。

**奈良** お盆には、お墓へ行つて迎え火を焚きまして、その火を提灯に入れて自宅へ持ち帰ります。このごろは自宅の前でやることが多いですね。お盆は十三日から十五日と言われていますが、本来は、旧暦の七月十三日から十五日です。更にいえば、昔の考えでは新しい日は、明け方から始まりますので、現在の感覚では、十六日の明け方までとなります。十三日の夕方に迎え火をして、ご先祖様をお迎えし、十六日の夜明け前に、送り火でお墓までお送りするのです。旧暦ですと満月になりますので、明るい月明かりのもと、盆踊りができたんですね。ご先祖様と一緒に踊り、最後にお墓までお送りする。つ

故人やご先祖様との関係を再確認し、生かされていることに感謝をしていくという意味で、お盆というのは重要だなというふうに思っています。

### 祈りの心を声にのせて

**加藤** お盆の時期に心掛けると良いことなど、ありますでしょうか。

**奈良** お盆だけではなく、日常的にお仏壇やお位牌に向かい手を合わせることでですね。単に手を合わせるだけという簡単なことでありながら、自分は自分であり、命をいただいているんだと



アーチ状の屋根がモダンな本堂



本堂の入り口に立つ「施無畏」像(製作：長江碌弥)





再確認していく重要な行動です。故人やご先祖様への気持ちや、生活での心掛けなど、心で思っているだけというのはなかなか続かないんですよ。やはり行為が大事ですから、手を合わせ、口で唱える。行為だけで心がなくても困るわけですが、心を持つようにして行為をし、行為をすることによって心を持つという、両輪ですからね。それを忘れてはいけません。少なくともそうやって日々感謝をして生きていく生き方というのは、自分を大事にしていく生き方になっていくんじゃないのかなど。

**加藤** なるほど。例えば、私たちが家で手を合わせるときに、「おはようございます、今日もよろしく願います」とか、「お盆が近いですね」というような語りかけでもいいわけですね。

**奈良** お経を唱えられたらなおいいですが、祈

りの言葉というのが重要なんだと思います。黙って心の中でのいうのは結構難しいんですね。口に出して唱えるというのは重要視すべきです。

**加藤** 「南無」というお唱えのしかたが手軽ですね。

**奈良** 曹洞宗の「修証義」でも、「合掌し、低頭して口に唱えていわく、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」とあるわけですから、そういう祈りの言葉というのを唱えましょう。道元さんは、

草の庵に

寝ても醒めても 申すこと

南無釈迦牟尼仏 あわれみたまえ

と歌にも詠んでいますので、ぜひお唱えしてみてください。

### いのちは繋がっている

**加藤** コロナが五類感染症となった今年の夏は、久しぶりに実家に帰るという方や、親戚が集まるという方も多いのではないのでしょうか。

**奈良** ご先祖さまに想いを馳せて手を合わせる時には、連綿と続いてきたご先祖さまの先にあ



長老の梅ちゃんは15歳

る自分の命が有難いものであると思うと同時に、自分以外の命も同様に大事なのだと感じて欲しいですね。お盆というのはそういう繋がりを再確認し、ある意味で親戚一族が集まって、共同体のつながりを再確認するという重要な儀式だと思うんです。顔を合やすことで、自分の命の大事さを再確認して欲しいです。みなさん、いろいろな問題を抱えていると思うのですが、袋小路に入り救いがないことでさらに悪化していくことはぜひ避けたいですね。そうしたときには、ご先祖様や、家族、親戚やお寺と相談することも、解決に結びつくひとつの手段となるかもしれません。

**長崎県 小川千恵子様**  
『曹洞禅グラフ』に『禅の友』、この十年ほど人生勉強をさせて頂いております。菩提寺である矢上の正覚寺さんで行われている梅花講で月に二回、御詠歌をお唱えしています。先日は春彼岸の御詠歌や御和讃をお唱えしてきましたが、お唱えする梅花講の参加者もずいぶん減っています。

十年前に主人が亡くなった時、家に籠もっていた私に何度も連絡をくれて、「外に出ましょう」と連れ出してくれたのが方丈様でした。それから永平寺への参拝旅行など、さまざまなお寺での活動に参加しています。

長崎県の仏教婦人部では、『曹洞禅グラフ』や『禅の友』の表紙を使って「お年玉入れ」を作り販売し、売上金を寄付したり、刺し子などを施したタオルを縫って永平寺に送るボランティア活動などを行っています。

御詠歌やご和讃は、私が主人を亡くした時のように、自分が身近な仏さまを持つと、胸に響くものがあるのではないかと思います。これからも雲山ご住職とともに、さまざまな場所で御詠歌をお唱えしたいと思います。



今回の特集にご登場頂いた奈良修一師のご著書『鄭成功―南海を支配した一族』を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(下記「お便り募集」送り先)まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。…………… **2023年8月末必着**

### 読者プレゼント

**曹洞禅グラフ163(冬)号プレゼント、故・須田道輝老師解説『曹洞宗檀信徒経典』は次の方々が当選されました。**

|            |            |
|------------|------------|
| 青森県／中山禮子様  | 岩手県／吉田真紀子様 |
| 岩手県／菊田信一様  | 宮城県／村上治憲様  |
| 宮城県／高橋久美子様 | 山形県／西山昌子様  |
| 新潟県／黒井勇作様  | 東京都／松岡和彦様  |
| 東京都／鈴木江莉奈様 | 神奈川県／清水悦子様 |
| 愛知県／重野宏美様  | 愛知県／二村健一様  |
| 三重県／中北亜加利様 | 兵庫県／大野隆子様  |
| 京都府／今川嘉代子様 | 鳥取県／山下栄様   |
| 福岡県／古賀サチ子様 | 長崎県／大崎敏様   |
| 長崎県／織田武人様  | 佐賀県／池内淳子様  |

### 読者からのお便り

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

**送り先**……………  
〒252-0116  
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画編集部

**お便り募集**……………  
**Eメールアドレス:**  
fujiki@water.ocn.ne.jp

# 毎日書道

書家 松山妍流

若悪獣困繞  
利牙爪可怖  
念彼観音力  
疾走無辺方

もし悪獣に囲まれて  
鋭利な牙と爪の怖るべきに  
かの観音の力を念ずれば  
無辺の彼方に走り去つて  
しまうだろう

『法華経』「普門品」偈より

若悪獣困繞  
利牙爪可怖  
念彼観音力  
疾走無辺方

ご家族のみなさまのご応募をお待ちしております

## 作品集

お手本を参考にして、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください。（無料）  
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。  
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。  
161号（夏号）～164号（春号）の審査発表は167号（冬号）にて行ないます。  
165号（今号）～168号（春号）の審査発表は171号（冬号）にて行ないます。

送り先 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画 ☎042-703-8641

締切 2023年8月末（末日消印有効）

松山妍流先生は、埼玉県所沢市吉祥院住職丸山劫外師のお姉さんで書家（佐藤柯流に師事）です。

## 『曹洞禅グラフ』 募集俳句選

選・尾崎竹詩

警策を受けて吸い込む梅の香を

茨城県 馬場信一

私も若かりし頃少し坐禅を体験したことがあります。精神統一しようとしても雑念が頭の中を堂々巡りしてしまいます。そんな時警策を受けると一瞬で雑念が消えてしまいました。その時の精神状態を「梅の香」が見事に表現しています。季語の持つ力を十二分に活用した句となっています。「梅の香」を下五に持ってきたのが大正解です。

雪蹴って獵夫犬より獣めく

神奈川県 小野沢邦彦

獵犬を連れて雪山で猪や鹿を狩っているのでしょう。気配を消して獣に迫り、狙い定めて獵銃を発砲したのです。確かな手応えがあったので獲物に詰め寄る獵師と獵犬。雪を蹴って駆け付ける様とその時の気持ち「雪蹴って」によく表れています。季語が多すぎると言う人がいると思いますが私はこの句の場合これで十分だと思います。

立春や時を忘れる電話かな

群馬県 佐藤千恵子

## 作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております（お一人3作品まで）

### お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

- はがき、封書で投稿  
送り先・〒252-0116  
相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画  
『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛
- Eメールで投稿  
fujiki@water.ocn.ne.jp

締切 2023年8月末（末日消印有効）

- ご応募の中から優秀な作品を選び、166号の誌上にて発表する予定です。
- 更に年に1回冬号（新年号）にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。

### 選者詠

昭和モノクロ流れるように散る桜

尾崎竹詩

前号で投句者のお名前に誤りがありました。誤…「義男」正…「良男」訂正してお詫び申し上げます。

日の出見る今日も元気で頑張ろう

千葉県 仲村佐和子

初日の出を拝んだのでしょうか。私も毎年初日の出を参拝しています。初日の出の太陽は何とも言えない神々しい光を纏い地球を照らしてくれます。「今年も頑張ろう」という気を起こさせてくれますね。

立春の頃はまだ寒い。出かけた人と会うこともまだまだ多くない。そんな季節のうずうずしている気持ちがついに長電話になってしまおうでしょう。きつと大した要件もなくただらと話ができるのは話す相手が気を許せる親しい方だからです。



**和**むよう手の平で胸を撫でていきます。胸の内側から沸き上がる感覚を手の平で受け止めるよう研ぎ澄まさせていきます。両手の平を胸周辺の置きやすい部位にそっと添えます。そこをスタートとして、手の平で胸全体を優しく丁寧に撫でながら、撫でられている胸側の感覚を評価判断なく素直に受け止め続けます。最後に手の平を胸の置きやすい部位に添えて和みます。

**労**るよう手の平で肩を撫でていきます。撫でられている肩側が心地よさの感覚となるよう撫で方を工夫し調整し続けます。撫でる部位は、右手の平を左肩先に置くところからスタートし、①肩上部に沿って左首の付け根部分まで。②左肩先に戻り、鎖骨に沿って喉元まで。労りの感覚に順じて撫で続けて下さい。左肩胸の変化に応じて右胸肩でも行なってください。

**委**ねるよう手を手で撫でていきます。左右どちらの手が主従というのはなく、互いに撫でている感触を愛おしく味わいます。縦・横・斜め・回転、当たる部位、撫でる強さ、そして手の平同士にこだわらず手の甲も使用し、瞬間瞬間にて想起される感覚を心地よさとして受け取るべく撫で続けて下さい。手全体へ丁寧に優しくクリームを擦り込むようなイメージです。

## 胸を撫でる

3



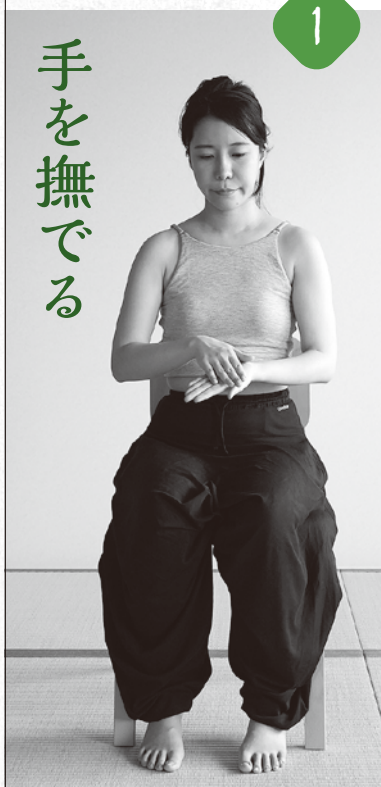
## 肩を撫でる

2



## 手を撫でる

1



## 安らかな未来に向かう

## 「八正道」的くらしかた

藤井隆英

ふじい・りゅうえい  
豊橋市一月院副住職。  
横浜市・徳雄山・建功寺  
勤務。北海道大学水産  
学部卒業。同大学院中  
退。整体師。NCC代表  
身心堂主宰。「anzen」  
ふ「安楽坐禅法」開  
発者。禅をベースにし  
たオリジナルの運動療  
法、動的瞑想法を伝え  
る活動を展開。

### 4「正語」～なにを発するか～

仏法による安らかな未来に向かう  
八つの指針「八正道」。今回は三つ  
目「正語」を参究いたします。  
「三学」という教えがあります。こ  
れは仏法的生き方を修めていくため  
の学びの根源であり、具体的には  
「戒」「定」「慧」の三項目です。  
◆戒：日々起こり続ける煩悩を身口  
意（行動、論理、想念）にて調  
える生活規範  
◆定：本質的な安寧を得るための実践  
基盤  
◆慧：四諦（苦集滅道）を探究してい  
くための根本視点  
「八正道」は、「三学」各項目に対応  
している実践指針です。  
◆戒：正語（尊重）・正業（尊厳）・正  
命（態度）・正精進（良縁）  
◆定：正念（洞察）・正定（検証）  
◆慧：正見（使命）・正思惟（適慮）  
本来「三学」とは、「戒定慧」三項  
目すべてが深く連関し合っているこ  
との意識化を基盤とし、世界を善き  
未来へと導く誓願を有し続けていく  
ことにより為される学びです。たと  
えば他の項目や世界への誓願を意識  
せず、三項目の一つだけを注力して  
学んでいくことは仏法の学びではな

く、仏法とは明らかに違うものです。  
その違う学びと評されるものは、本  
質の仏法から思慮すると、自らのみ  
ならず世界の安寧をも暗澹とさせう  
るものなのです。  
「三学」実践指針としての「八正道」  
も同様に、各徳目のどれかひとつだ  
けが大切なのではなく、仏法に沿っ  
た生き方と照らし合わせ随時選択さ  
れた徳目を実践していくことが大切  
なのです。  
今テーマ「正語」とは、三学のう  
ち生活を調える規範である「戒」の  
ひとつです。  
正語における「語」とは、「言葉」  
という意味に限定されるものではな  
く、西洋の基礎概念としてギリシア  
哲学から伝わる「ロゴス（論理・定  
義・理性）」に近い意味です。仏法的  
ロゴスを考慮した上で「正語」とは、  
すべての存在を尊重し公平に観る理  
性意識を基盤にした、調和や安らぎ  
に満ち発せられる言葉遣いや論理思  
考の規範なのです。  
今回は、手の平にて感じることで  
緊張を解く「撫でるワーク」をお伝  
えします。





インタビューに応じるエマさん。今後、社会に望む変化として、被害認定の範囲拡大、宗教虐待で社会生活が困難になった人への支援、相談窓口の充実などを挙げた。

旧統一教会に母親が入信したエマさん（仮名、四〇代女性）。  
約三十年に及ぶ体験を語っていただいた。

# 宗教虐待

被害者の声を聞く

後編

※この写真はイメージです

～前号の続き～

## 「こころを苛む 罪の意識」

三つ下の弟は、エマさんとはだいぶ違う境遇だったかもしれない。幼いエマさんが「サタンの側」だと言われて攻撃されたとすれば、弟は

「あちら」に連れていかれた側だった。エマさんが中学生の頃、小学校の高学年になろうかという弟は、内向的な性格だったこともあってか、母の布教と一緒に回らされた。

弟は、当時、母と家庭を訪問するうちに、この家庭にどれだけの財産があるかも見えてきたという。母に連れられたとはいえ、活動に足を踏み入れた弟は、のちに罪の意識に苛まれることになった。よその家の財産が失われることに加担し、その家を不幸にしまったのではないかと。弟は中学生のころから引きこもることで教会との距離をとるようになった。しかし以後、統合失調のような精神の障害が出て、今に至る約三十年間、引きこもりのままである

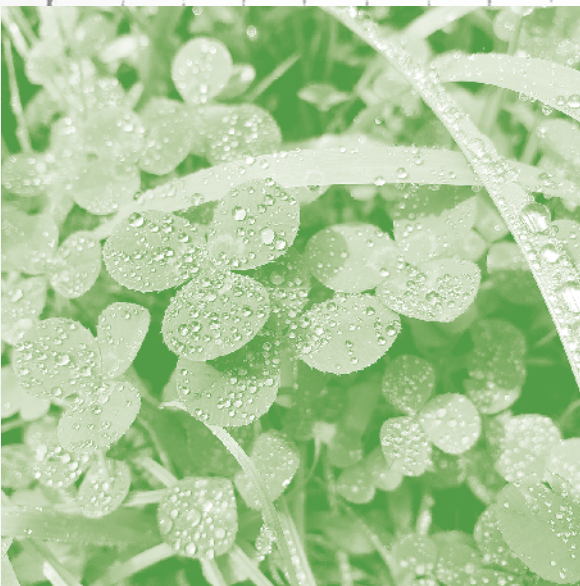
という。「弟は幼いころから教会の人とのやり取りが多く、逸脱した世界で過ごしていましたから、社会生活と相いれなくなって今も働けない状態です。」

エマさんは二十代になって一人暮らしを始め、母親との距離をある程度置くことができるようになった。しかし葛藤はついて回った。母は婦人部長の肩書で献金集めの活動をしていた。

「よそ様の財産を奪って、不幸にしているんじゃないかという気持ちはいつもありました。街頭に立って布教している人たちを見ると、そこに母がいるのではと、いつも心配でした。」実家に帰ると、壁に穴が開いていて、母への恨みから弟が暴力を振るったとわかった。

そうした具体的な不安だけでなく、もっと漠然とした影がエマさんの人生全体を覆ってもある。「マインドコントロールされた母によって育てられる自分というのというのは、すごく曖昧です。どこかぼんやりしているというか、生きる実感が乏しいというか。」

あれだけ逃れたかったものも、約三十年のあいだにエマさんの一部となっていたのだろうか。「母の宗教の影響と一緒に自分の人生も進んできたので、伴走しているところはありますね。」ただしその長い伴走は、ほとんど誰にも知られることのないものだったかもしれない。「社会の闇に取り残されていたし、忘れられて透明の存在みたいな気持ちでした。」





## 続いてゆく 「宗教二世」の日々

山上容疑者が安倍元首相を撃ったことで、「宗教二世」がクローズアップされ、それが期せずしてエマさんの人生をも大きく変えた。国会への陳情に参加して新たな法律ができたわけではない。思い悩む多くの二世の声に触れ、自身をより深く理解し、少しずつではあるが、受け入れることができるようになった。「別の自分が生まれた気持ちです。」

とはいえ、エマさんは宗教二世と一口に言っても様々だという。とりわけ三十年近くも統一教会の影響下にあった自分たちの世代を「焼け野原」と表現する。八千万円以上の財産を失い、宗教虐待の影響下の人生を長く歩まざるを得なかった。取り返しのつかなさの色濃くにじむ表現だ。新たにできた救済法も、エマさんたちの数十年間の被害のすべてをカバーすることは難しい。いまだ救済の手の届かない痛みとともに、エマさんたちは生きている。

現在七十代になった母は、以前よりも穏やかになってはいるが、相変わらず毎朝五時に文鮮明夫妻の写真の下でひれ伏したり、説教集の訓

読をしたりして過ごしている。時には母と幸せについて話すこともあるという。「家族が身を削りながらもあなたと一緒にいたことが愛情なのだと感じてほしい」と話す、「わからない」の一点張りだ。ただ「みんな幸せになっていないよね」というと、それはわかるようで「模索している」と返ってくる。



エマさんは統一教会の影響のない人生を望んできた。だが、母が脱会すればいいかといえば、そう簡単ではないという。「脱会した後に、本人が何をもって幸せになるかは、私たちにも分からないところがあります。またそのために私たちが人生をかけてエネルギーと時間を費やすことが果たして良いのかも、分からなくなっています。」

約三十年の間、その時々でエマさんに手を差し伸べてくれた大人たちもいた。アルバイト時代に知り合った大人たちが、知らなかった音楽や本のことを教えてくれ、広い世界を見せてく

れたこともあった。学校や病院の先生、医療や福祉現場の方々などたくさんの方々に支えてもらった。特定の宗教を信じるわけではない、というエマさんだが、心を支えてくれるものも確かにある。「その日その日で支えてくれた方が神様、仏様だったんだなという気持ちが大きいです。悪い方に引っ張られず、良いほうに引っ張る力を毎日探しながら、という感じですね。そうしたら、ちゃんといらっしゃるんだなって。」(終わり)





# お盆の起源は 仏教＋イランの宗教？

正木晃

写真—金子悟



正木晃

(まさき・あきら)

宗教学者。一九五三年、神奈川県生まれ。国際日本文化研究センター客員助教授を経て、慶應義塾大学、立正大学講師。『「千と千尋」のスピリチュアルな世界』など多数の著書がある。



夏のお盆は、秋のお彼岸（彼岸会）とともに、最も盛んな先祖供養にまつわる仏事だ。ただし仏事にもかかわらず、起源はどうやら仏教ではなかったらしい。

お盆は正式には「盂蘭盆会」といい、「施餓鬼（曹洞宗では施食会）」がいと名まれる。「盂蘭盆」は以前はインドの言葉のサンスクリット（梵語）で「逆さ吊り」を意味する「ウランバナ」の漢字による音写と言われていたが、こじつけのたぐいのように、学術的には成り立たない。

典拠とされる『盂蘭盆経』には、こう説かれている。

お釈迦様の二大弟子として、智慧第一の舍利弗とならび、神通第一の目連（目犍連）が得意の神通力で、亡くなった自分の母親が今どうしているか、と探ったところ、餓鬼道に堕ちて飲食できないので、



がりがりに痩せ細り、骨と皮ばかりになっていた。自分の力では救えないとわかった目連は、お釈迦様に「母を救う方法はありませんか」と尋ねると、「夏安居（夏期講習会）の最後に、僧侶たちが安居中の行動を反省し懺悔しあう日（自恣）がある。この日に、七代前の祖先から現在の父母に至る厄難中の者たちと、僧侶たちを、ともに供養すれば、僧侶たちの清らかな力のおかげで、餓鬼道に堕ちて苦しむ者たちは必ず救われる」とさとされた……。

実は『盂蘭盆経』は、インドではなく、中国で創作された偽経の疑いが濃い。最近では、「盂蘭盆」は中世イラン語で「靈魂」を意味する「ウルヴァン」と





いう言葉を漢字で音写したものだという説が有力だ。かつてイランでは三〇〇〇年以上も前に成立し、現存する世界最古の宗教というゾロアスター教が信仰されていた。その教えでは男系祖先の霊は天界で子孫の栄枯盛衰を見守っている。子孫に危機が迫ると地上に降臨し、守護霊として子孫を救ってくれるとみなされ、春分の日の直前の五日間には「祖霊祭」が行われた。

家中を花で飾り、「ナーム・グラハン（人名帳）」と呼ばれる過去帳をとりだし、教典の文句や呪文を唱えながら、ご先祖様の名前を読み上げる。天界から現世に呼び出されたご先祖様たちの霊はそれぞれの家庭で楽しく五日間を過ごした後、再び天界へと戻る。この功德で現世の人間たちは今後とも一年間、ご先祖さまたちの霊によって守護してもらえる。



以上を根拠に、イラン学の専門家からは、シルクロードを中心に東西交易で大活躍したソグド人のようなイラン系の人々が母国から「祖霊祭」を中国にもちこみ、同じくインドから伝来してきた仏教と融合した結果、季節が春から夏

へ移され、盂蘭盆会が成立したと主張している。その時期は六世紀まで遡る。ちなみに日本で初めての盂蘭盆会が催されたのは推古天皇の十四年（六〇六）、つまり聖徳太子の時代だから、先祖供養の歴史は長い。



|                                         |      |    |
|-----------------------------------------|------|----|
| いのちは自分だけのものではない                         | 島蘭進  | 2  |
| 特集 お盆の過ごしかた——死を想い、命の繋がりに気づく 奈良修一師インタビュー | 加藤順子 | 4  |
| 毎日書道                                    | 松山妍流 | 12 |
| 募集俳句選                                   | 尾崎竹詩 | 13 |
| 安らかな未来に向かう「八正道」的くしかた④                   | 藤井隆英 | 14 |
| インタビュー 宗教虐待——被害者の声を聞く——後編               | 矢田海里 | 16 |
| お盆の起源は仏教+イランの宗教？                        | 正木晃  | 20 |

表紙画「絵画と仏教の始まりを思う（仏足と二匹の金魚）」／平川恒太

前回の表紙画では、絵画の起源が愛する人の影を映したものだという逸話を紹介し、お釈迦様の姿を切り絵で作りその影をスプレーで映しました。その時に私は、仏足石もお釈迦様の足跡を写したものだと思い絵画の始まりとの共通点に気がつきました。歩みを支える足は、その人の人生を象徴します。今回は仏足と双鱼相などを表す2匹の金魚を描きました。夏らしさと涼しさを感じてもらい、お釈迦様が歩んだ道に想いを馳せていただければ幸いです。

ちくま新書

# 新宗教を問う 近代日本人と救いの信仰

「新宗教もその一部である救いの宗教とは何か。なぜ救いの観念が人類にとってかくも重要であり続けているのか、という問いがある。これは「宗教とは何か」という宗教論に連なっていく。」



島蘭進 著

島蘭進 |

1948年生まれ。宗教学者。  
東京大学大学院名誉教授。  
上智大学神学部特任教授。  
同グリーンフケア研究所所長。  
専門は日本宗教史。

出版社 筑摩書房

新書版/317ページ

定価: 本体940円+税

書店にてお求めください